

全国科学博物館活動等助成事業 報告概要 (平成30年度)

申請担当者	ふりがな 氏 名	おく しま ゆう いち 奥 島 雄 一	助成金交付番号 18017
	組織・職名 (部室科名共)	倉敷市立自然史博物館・主任(学芸員)	
	事業名	損傷剥製の修復技術習得のための実践的研究	

I 事業の内容

(1) 事業の目的

破損・虫害などの損傷を受けてしまった剥製標本を、自然史資料としての価値をできるだけ損なうことなく修復する技術を研究しつつ習得する。また、その成果を公開することで、現存する傷んだ剥製標本の博物館資料としての保存と有効活用を広く推進する。さらに、経費の抑制のみならず携わる人にやりがいを与えるボランティア活動としての持続可能性を検証する。

(2) 事業の実施場所及び実施期間

実施場所：倉敷市立自然史博物館（岡山県倉敷市中央2-6-1）

実施期間：平成30年4月1日から31年3月31日まで

(3) 事業の具体的実施内容及び方法

(3-1) 事業実施主体

事業は倉敷市立自然史博物館友の会（会員数約850名）の自主グループ「脊椎動物グループ」の活動として実施した。任意団体の事業とすることで、迅速な事業実施を可能にした。

今回の事業に関する連絡係と日程調整は奥島とグループ代表の原田愛が担当した。活動日の案内と簡単な活動報告は主として原田が担当し、「倉敷市立自然史博物館友の会ニュース」（月1回発行）及び脊椎動物グループ専用メーリングリスト「sekitsuidoubutu_k」（随時）を活用して行った。

(3-2) 事業対象標本

平成29年7月に倉敷市立自然史博物館が他施設より譲り受けた鳥類の本剥製97種152点を対象とした。これらの剥製は、岡山県内の公共施設に展示されていたもので、保管施設の老朽化による解体と剥製そのものの傷みが激しいことから、当館が引き受けない場合は、廃棄される可能性があるとのことだった。

(3-3) 技術指導者

標本土、相川稔氏に指導をいただいた。相川氏はドイツのボーフム標本作製技術専門学校を卒業後、同国ヘッセン州立ヴィースバーデン博物館で標本作製技師（2000～2007年）、神奈川県立生命の星・地球博物館で技術嘱託員（2009年）の勤務経験がある。最近では、天王寺動物園の剥製修復や相模市立博物館でのボランティア指導等の実績を有している。本事業の指導的協力者としては国内において最適の人物である。準備段階から修復作業の手順や使用機材・消耗品についてアドバイスをいただき、事業期間中に3度倉敷へお越しいただいて脊椎動物グループメンバーに直接、

実演指導をしていただいた。この度、相川氏はドイツのボン自然史博物館に就職され、本事業における指導協力日程を終えた 2018 年 10 月に渡航された。

(3-4) データの復元

2018 年 1 月に、剥製収集の中心的な役割を担当されていた宮本純男氏（渋川動物公園園長）を奥島が訪ね、各剥製の写真と標本台帳の写しをご覧ください、聞き取り調査を行った。

5 月、標本ラベルを作成し、取り付けた。

(3-5) 使用機材・資材の調達

電動丸ノコ、電動ドリル等の工具は博物館の備品を使用した。その他の必要消耗品については、相川氏の指導に基づいて購入した。

(3-6) 剥製の状態調査と仕分け

5 月 25～27 日（1 回目）、相川氏に来ていただき実施した。具体的には、次のように仕分けを行った。

A. 本剥製として修復するもの

状態を確認し、次の①～⑤のうち、必要な作業を剥製毎にメモした。

- ① 台座
- ② 嘴・脚・眼拭き
- ③ 羽そろえ
- ④ ほこり・すすとり（アルコール）
- ⑤ 欠損 羽、眼（割れ、欠）、その他

B. 部分的な標本、羽標本とするもの（破損が著しいもの）

(3-7) 剥製の修復

8 月 1～4 日（2 回目）および 9 月 29 日～10 月 2 日（3 回目）に相川氏に来ていただき、指導いただきながら一緒に作業していただいた。作業場所は、博物館の工作室及び講義室とし、作業は特に支障がある場合を除き、希望する展示観覧者に公開して見学してもらうことで、本事業の必要性や脊椎動物グループの活動を知っていただく機会とした。

作業内容は次の通り。

A. 本剥製として修復するもの

- ① ほこり・すす・落羽飛ばし（コンプレッサー、刷毛）
- ② 台座とりつけ（針金の太さチェック）、破損部分の接着
- ③ 嘴・脚・眼拭き（義眼交換）
- ④ 液洗浄／和紙貼り



5 月 27 日の作業の様子（右端が相川氏）



8 月 4 日の作業の様子



10 月 2 日の作業参加者で記念撮影

- ⑤ 羽そろえ／和紙貼り
- ⑥ トリートメント（アルコール 95%：加脂剤＝100：1）
- ⑦ （彩色）←好みの問題

B. 部分的な標本，羽標本とするもの（破損が著しいもの）→パーツ毎にチャック式ビニール袋に入れて収納

相川氏の指導日以外では，月に 1～2 回ペースで作業日を設けて修復に取り組んだ。

（3－8）修復剥製の展示公開

館内の一角に脊椎動物グループが作製した標本を収蔵するスペースがある。収蔵と言っても大部分がガラスケースで，展示を兼ねて来館者に脊椎動物グループの活動を PR する場となっている。修復作業が完了した剥製を順次，ガラス戸の保管棚に並べていった。併せて事業紹介のポスターを作製して掲出した。

倉敷市立自然史博物館では，友の会と共催で毎年 11 月 3 日に普及イベント「自然史博物館まつり」を開催し，今年も 8,825 名の来場者で賑わった。脊椎動物グループでは，グループの活動紹介を兼ねたワークショップと展示を行い，この時点で修復を終えていたものを中心に 70 点を展示した。

また，平成 30 年 12 月 22 日～平成 31 年 2 月 24 日の会期で特別陳列「新着資料展 2018〈総合〉」を開催した。それまでに修復できた本事業の剥製 77 点に加え，ほかからの受入れ剥製も脊椎動物グループがメンテナンスを行い，計 92 点を展示公開した。

（3－9）事業の実践報告

剥製の修復についてはマニュアルもなく，国内外を問わず確立された技術はない。本事業で相川氏とともに試行錯誤しながら実践した経験を報告にまとめておくことは，災害により被災した剥製や今後引き取り手を探す剥製の保存と有効活用に大きく貢献できるものと思われる。

事業申請者の奥島と指導者の相川，それから実施主体の脊椎動物グループの中心的メンバーが共著で本事業の実践報告をまとめ，「倉敷市立自然史博物館研究報告第 34 号」（3 月 25 日発行）に投稿，掲載された。本報告を調査研究報告書として提出する。本誌は国立国会図書館をはじめ，国内約 500 か所の博物館・研究機関等へ寄贈・交換雑誌として配布される。



保管棚に収められた修復剥製



11 月 3 日「自然史博物館まつり」での展示の様子



特別陳列「新着資料展 2018〈総合〉」（2018 年 12 月 22 日～2019 年 2 月 24 日）での展示の様子

一般への有料頒布もある。今回は、別刷 200 部を作製し、関心がある機関・個人へ配布中である。

(3-10) 会計管理

倉敷市立自然史博物館友の会の特別会計に「脊椎動物グループ」会計を設け、助成金の受け入れ、支出の管理を行った。平成 30 年 4 月に開催される友の会総会において予算計画の承認を受けている。事業後は平成 31 年 4 月に開催される同会において決算報告を行う（その前に友の会の他の会計と共に会計監査を受ける）。会計管理は本事業申請者で友の会幹事でもある奥島が担当した。

(4) 事業の成果と今後の展望

平成 31 年 3 月末までの事業期間中、剥製修復に関わる脊椎動物グループの活動日は計 30 日で、延べ 291 名が活動に参加した。三徳園から譲り受けた剥製 152 点のうち、修復を終えた剥製は、92 点で、残りの剥製については、事業期間終了後も脊椎動物グループメンバーが中心となって修復作業を進めていく予定である。

さらに、この活動が新聞（2018 年 12 月 20 日付、山陽新聞）で取り上げられたことにより、3 点の剥製（オジロワシ、ヤマドリ 2）の寄贈が相次いだ。今後、同様の剥製標本譲渡の打診があった場合には、奥島は資料収集担当として動物担当の職員らと連携を図りながら、可能な限りの修復と活用を想定して資料の受け入れに努めたい。

本事業により、利用可能な博物館資料が充実しただけでなく、参加者はみなやりがいを感じて作業することができており、博物館と市民が連携した持続可能な博物館活動としてさらなる進展も期待できる。また、全国科学博物館振興財団や博物館関連団体などから発表の機会を与えられた場合は、積極的に対応する。



修復前(左)と修復後(右)の剥製(上:カワセミ;下:オジロワシ)